

辞書を用いて未知語を検索する能力と既知の文法力 を備えた学習者の能力との関係に関する研究

山西 敏博*1

Research on Relationship between Searching for Unknown Words Using
Dictionaries and Ability of which Learners Have Already Acquired about
Grammatical Knowledge

Toshihiro YAMANISHI

This study researches whether using a dictionary while reading is efficient and if so, which levels of learners are able to use dictionaries effectively.

Dictionaries have an important place in foreign language learning, especially in vocabulary acquisition and reading comprehension. Even so, some researchers have not yet agreed on how necessary it is to make use of them in language learning. The author investigates whether using dictionaries is really effective in reading through these opinions.

KEYWORDS : lexicography, vocabulary acquisition

1. まえがき

本論文は読解時において辞書の活用は有効的か否か、また、どのような語学力を持った者に対して有効であるのかを探る手立てとすることを目的とする。

これまでの英語教育の世界では、Bottom-Up 方式が通例であった。いわゆる「精読方式 (Intensive Reading)」でその英文にじっくりと取り組みながら熟読をさせる方式を採っていた。ところが、1970 年代、及び 80 年代になると、Top-down 方式が第 2 言語習得方法の中では主流を占めていった。

本来読解の目的は記された文章を一定の速度

で把握することであり、そのためには Top-down 方式においては必要な文字情報をすばやく処理する必要がある、未知の語句が出てきてもこれまでに読み手が得ている既知の情報を元にそれらの語句の内容を推測しながら読み進めていくという作業になるために、そのつど辞書を使って作業をしている余裕などないといった印象があった。こういった背景から辞書を使いながら文章を読んでいくことは、未知の事象に対する推察力を働かせる事が阻害され、またそのような能力が衰退してしまうといった懸念から、辞書の使用は推奨されてはいなかったという経緯がある。それに対して Carter 及び McCarthy (1988) は、このような見解に対しては経験的な事象よりも推測に対して重

*1 一般科 (Dept. of General Education), E-mail: yama0225@oyama-ct.ac.jp

きが置かれると述べており、上記の見解に対して反論をしている。

反面、語学学習において、辞書の活用は必要不可欠なものであるという事も半ば常識的に言われている。効果的に辞書を活用することで実際に記されている文に触れながら数多くの語彙を同時に習得し、様々な情報を入手していけるといった利点もある。このような双方の考え方から、前述したように、この論文では読解時において辞書の活用は有効的か否か、また、どのような語学力を持った者に対して有効であるのかを探る手立てとする。

2. 先行研究

Schofield(1982)は、辞書を活用することで、読者が既に知り得ている情報としての文法を含む読解過程において重要な役割を果たすものであるとし、文章を読み進めていく上で文脈に対して想像力を働かせていく上でも有効な道具であると述べている。Hynes (1984) は、文脈の中から未知の単語を推察しながら読み進めていくのは自ずと限界があるとし、辞書を活用していくことで読解の過程においては単なる推察力を働かせていくよりも一層効果的に文章を読み進めていくことができると述べている。BensoussanやSim, Weiss(1984)は、外国語学習においてもっとも自然な状態で辞書を用いていくことは必要に応じて行っていた方がよい活動であると、辞書活用の効能を述べている。接頭語や接尾語などの知識が事前にあり、未知の語句に出くわした時にそういった事前情報を駆使して読みこなしていく能力が万人に備わっていれば問題はないものの、必ずしもそのような情報を持ち合わせていない場合には、辞書は大変有効な媒体となるのは自明の理である。Summers(1988)は、学習者が2つの文脈においてその関係を理解しなければならない時に、辞書の活用は語彙習得においては有用であると述べている。その文脈とは、すなわち未知の語が載っている文と、辞書にその意味が説明されている文との関係である。これは英英辞典においてはよく見られる事であり、英英辞典にはその語の意味を説明する際に簡潔な文で説明されていることから、英和辞典よりもその語の持つイメージがわかりやすく、未知の語の意味をより詳しく知りたい時には英英辞典は有効なツールとなっている。更にSummers は「読者が自分の読んでいる文章の中

で定義がはっきりとは理解できていない場合においては、精神的な活動において辞書で未知の語を調べることにより読み手の中に語句や概念がしっかりと植えつけられるといった効果が備わり、それは論説文のような文体においてはより顕著である」と述べている。これこそ上記の英英辞典での例同様に、**target word** に対して推測のみで漠然と意味を把握したつもりでいるよりも、その時点で辞書でしっかりと意味を調べた上で確実に理解をした方が、読解に対する理解力は格段に上がるという実証になる。

3. 問題提起

これらの点からより調査すべき点が浮かび上がってくる。第1に辞書を活用する事で読解をする際に効果があるかどうかという点である。すなわち、読解をする際には辞書は有用であるという意見がなされている(投野, 1988a, Knight, 1994)。一方、辞書の活用は読解には効果は示さないという見方をする者もいる(Bensoussan, Sim, Weiss, 1983, Nesi, Meara, 1991)。第2にどのような能力を持った被験者にとって辞書の活用はより効果的かということである。Knight(1994)は上記したように語彙能力が低い集団ほどその恩恵を受ける可能性が高いということを示した。第3に、文法を背景的知識とする能力は辞書を用いる上で関連性があるのだろうかという点である。その点については関連性はあると述べている研究者もいる

(Scholfield, 1982, Bensoussan et al, 1984)。第4は、未知の語句を多義語として当てはめていく事は Lupescu&Day が指摘するように辞書を活用する者にとっては問題があるのかという点である。

これらの疑問を解消すべく、本論では文章を読解する際に、文法力を持った被験者の能力と彼らが辞書を効果的に利用できるのかといった関連性を調査する事を目的とする。英検形式の文法構文テストを受験させ、更に辞書を使用した上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連があるかどうかを調査し、それによって与えられた文脈の中でより適切に意味を理解できるかどうかについて調べていくことを目的とする。

4. 研究仮説

- 1) 英検形式の文法構文テストと、辞書を使用した上での読解テストとのそれぞれ

- で出された得点との間に関連はある。
- 2) 文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある。
 - 3) 多義語に直面した際にその文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める。

5. 研究方法

5.1 研究対象者

この研究では国立高専1年生81名(40名、41名)を被験者とした。外国語としての英語学習を中学校で3年間受けてきている者である。研究期間に際しては2ヶ月間を費やして行われた。英語検定試験(英検)の取得状況を被験者の現在の持つ英語学力と仮定した場合、英検5級(中学1年生修了程度)取得者は6名(7.4%)、4級(中学2年生修了程度)取得者は15名(18.5%)、3級(中学修了程度)取得者は19名(23.5%)、準2級(高校中級修了程度)取得者は1名(1.2%)、未取得者は404名(49.4%)である。

5.2 研究対象資料

2002年度の英語検定試験(英検)3級1次筆記試験を用いて、これをPlacement Testの代わり(Pre-Test)として用いた。この試験の出来栄によって語彙能力が高い実験群集団(辞書使用可)と語彙能力が低い実験群集団(辞書使用不可)、また、語彙能力が高い統制群集団(辞書使用不可)と語彙能力が低い統制群集団(辞書使用不可)というように各組を4集団に分類した。加えて、読解教材(Post-Test)は2000(平成12)年度英検準2級1次試験(p.124, B)の長文を採用した。語数は269語であり、被験者にはレベルが多少高度なものになっている。

5.3 得点の扱い

英検を用いて各集団にPlacement Testを行なって4集団に分類し、それぞれの集団が辞書を用いた場合、用いなかった場合において獲得した得点を比較、分析した。

5.4 計画

この研究では、英検形式の構文テストと辞書使用テストの2種類の試験を用いて行なう。構文テストは40題の設問があり、その設問では英文の括弧内に正しい語句を入れる択一方式が採用されている。読解教材は2000(平成12)年度英検準2級1次試験(p.124, B)の長文を採用した。語

数は269語であり、FleschのReadabilityは65.9であり、判断基準は標準的、高校2年生学習内容修了程度に匹敵する。

5.5 研究過程

最初の時間に、高専1年生の各組で2002年度の英語検定試験(英検)3級第2回・第3回1次筆記試験を構文テストとして用意し、これをPlacement Testの代わりとして用い、この試験の出来栄によって語彙能力が高い実験群集団(辞書使用可)と語彙能力が低い実験群集団(辞書使用不可)、また、語彙能力が高い統制群集団(辞書使用不可)と語彙能力が低い統制群集団(辞書使用不可)というように各組を4集団に分類する。

5.6 データ分析

採点方法は以下のような形式でまとめ上げた。

- 1) 構文テストは択一方式を採用していることから、回収して手動で採点を行なった。満点は40点である。
- 2) 読解教材を行なう前に多義語の内容を提示したPre-Testは7点満点とし、文脈上適切な語を選ぶ練習をさせる。
- 3) 辞書を用いさせた読解テストは本文中に出てきた多義語で正しい訳出がなされていれば1点を与えた。他の下線部においては、それらの語の訳出ができていてもいなくても得点には反映されない。満点は7点となる。

6. 結果

表1は構文テストとPre-Test、辞書使用可能な読解テストとの標準偏差と平均値である。

表1 構文テスト、Pre-Test、辞書使用可能な読解テストとの標準偏差と平均値

N=80 (Post-Test)	構文テスト	Pre-Test	辞書使用可能テスト
Mean	22.3(55.8%)	2.70	4.48
Standard Deviation	6.85	1.25	1.50

表2は構文テストとPre-Testとの相関を示したものである。これによると、双方の相関は存在しなかった。

表2 構文テストと Pre-Test との相関

founded	.16	however	-.11
work	.15	hole	.02
name	.22	country	.15
found	.23		
Total	.12		

n.s.

表3は読解テスト(Pre-Test)間の相関関係を示したものである。これによると、ここでもそれぞれにおいて相関は見られなかった。

表3 読解テスト(Pre-Test)間の相関関係

	founded	work	name	found	however	whole	country
founded	——	-.14	.13	.04	-.09	-.05	.15
work	.14	——	.96	.88	-.20	.19	.19
name	.13	.96	——	-.13	-.76	-.01	.16
found	.04	.09	-.13	——	-.02	.10	.01
however	.09	-.20	-.76	-.02	——	.02	-.14
whole	-.05	.02	-.01	.10	.01	——	-.05
country	.15	.19	.16	.01	-.14	-.05	——
Total	.21	.27	.19	.27	-.03	.17	.19

n.s

Mean	SD	Mean	SD	Mean
founded	.20	.40	however	.07
work	.85	.36	whole	.12
name	.63	.49	country	.12
found	.70	.46		

研究仮説の第2項目である「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」に関して、被験者を Placement Test の代わりとして用いた構文テストの出来栄によって語彙能力が高い実験群集団(辞書使用可)と語彙能力が低い実験群集団(辞書使用不可)、また、語彙能力が高い統制群集団(辞書使用不可)と語彙能力が低い統制群集団(辞書使用可)というように各組を4集団に分類した。得点率が55%以上の集団を上位集団とし、それ以下の集団を下位集団とした。更に辞書を使用することを許可する集団と許可しない集団の数もそれぞれおよそ半数ずつと均等に振り分けた。表4では集団数と平均値、及び標準偏差値を示している。

表4 4集団内の構文テストにおける平均値と標準偏差値

	N	Mean
SD		
上位集団 A (辞書使用 可)	20	28.7(71.8%)
上位集団 B (辞書使用不可)	20	28.7(71.8%)
下位集団 C (辞書使用 可)	19	16.4(41.0%)
下位集団 D (辞書使用不可)	21	16.3(40.8%)

表5-1は4集団の Pre-Test における平均値と標準偏差値を示している。一元配置法分散分析方法を集計方法として用いたが、それによると各集団で大きな差異が見られた。また、有意確率を算出してより細部に集団別の相関を分析していくことに加えて、この4集団の結果を示すために表5-2で一元配置法分散分析方法を用いた。それによると、大きな相異が見られた ($F(80,3) = 7.864$, $p < .001$)。

また、表5-3より集団AとC,D及び集団BとC,Dとの間に相関が見られた ($p < .001$)。一方、集団AとB、集団CとDとの間には相関は見られなかった ($p < .001$)。

表5-1 4集団の Pre-Test における平均値と標準偏差値

	Mean	SD
上位集団 A (辞書使用 可)	3.36(48.0%)	.76
上位集団 B (辞書使用不可)	2.90(41.4%)	.99
下位集団 C (辞書使用 可)	2.11(30.1%)	1.28
下位集団 D (辞書使用不可)	1.50(21.4%)	1.05

表5-2 4集団の Pre-Test における一元配置法分散分析方法

	SS	df	MS	F
間	29.290	3	9.763	7.864
内側	95.599	77	1.242	$p < .001$
計	124.889	80		

表5-3 集団同士の多重比較 (LSD)

	上位集団A	上位集団B	下位集団C	下位集団D
上位集団A	——	——	*	*
上位集団B	——	——	**	***
下位集団C	*	——	——	——

* $p < .001$ ** $p < .05$ *** $p < .01$

表6-1は4集団における辞書使用許可の読解

テスト(Post-Test)の平均値と標準偏差値である。ここでも表6-2より一元配置法分散分析方法を集計方法として用いたが、それによると各集団では差異は見られなかった。しかしながら、表6-3,4においては、一部に関して相関が見られた。

表6-1 4集団における読解テスト(Post-Test)の平均値と標準偏差値

	Mean	S D
上位集団 A (辞書使用 可)	4.59(66%)	1.50
上位集団 B (辞書使用不可)	4.63(66%)	1.31
下位集団 C (辞書使用 可)	4.53(65%)	1.65
下位集団 D (辞書使用不可)	3.50(50%)	1.31

表6-2 4集団の Post-Test における一元配置法分散分析方法

	SS	df	MS	F
間	8.667	3	2.889	1.297
内側	171.555	77	2.228	n.s.
計	80.222	80		

表6-3 読解テスト(Post-Test)間の相関関係

	founded	work	name	found	however	whole	country
founded	—	.09	.14	-.16	.18	.15	-.13
work	.09	—	.24*	.82	.18	.09	.04
name	.14	.24	—	-.75	-.13	-.02	.17
found	-.16	.08	.08	—	.11	.18	.12
however	.18	.18	-.13	.11	—	.16	-.07
whole	.15	.09	-.02	.18	.16	—	-.20
country	-.14	.04	.17	.12	.07	.20	—
Total	.18	.25	.21	.19	.22	.25	.13

* p<.05

	Mean	SD		Mean	SD
Found	.88	.33	however	.57	.50
work	.46	.50	whole	.53	.50
name	.83	.38	country	.48	.50
found	.72	.45			

表6-4 集団別 構文テストと読解テスト(Post-Test)間の相関関係

	集団 A	集団 B	集団 C	集団 D
founded	.28	-.01	.20*	.32**
work	.44	.20	.20	.34
name	.24	.21	.10	.36
found	.26	.26	.17	.20
however	.44	.24	.24	.21
whole	.44	.23	.24	.15
country	.27	.29	.13	.37

* p<.05** p<.01

7. 考 察

本研究では4.の研究仮説で提示した1)「英検形式の文法構文テストと、辞書を使用した上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連はある」、2)「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」、3)「多義語に直面した際にその文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める」という3点について焦点を絞ってきた。まず、表2では構文テストと Pre-Test との相関は見られなかったが、表6-4では構文テストと Post-Test との相関はわずかながらも見られた。また、表5-2では4集団の Pre-Test における一元配置法分散分析方法による相関においては明確な相関関係が現れていたが、表6-2では4集団における辞書使用許可の読解テスト(Post-Test)の間には相関関係は現れなかった。これは研究仮説1で提示した「英検形式の文法構文テストと、辞書を使用した上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連はある」についての立証は必ずしもなされてはいなかったことにつながる。すなわち Schofield (1982) が述べていたように、文法知識が予め備わっていることによって辞書から必要な意味を引き出す際には、その知識が予備となって適切な訳出がなされるということは必ずしも言えなかったと言える。しかしながら、ここでは Pre-Test の時点で単語語彙力の差があった被験者に辞書使用の許可を与えることによって獲得得点に差異がつかなくなったということで、辞書を活用することの影響が出たものと考えることができる。

表7-1はそれぞれ訳出する際に焦点となった語において、4集団が Pre-Test、及び文章読解テ

ストで得た得点の平均値を表している。

表 7-1 各集団における Pre-Test と読解テスト (Post-Test) との平均値

	集団 A	集団 B	集団 C	集団 D	集団平均
	Pre-T	Pre-T	Pre-T	Pre-T	Pre-T
	Post-T	Post-T	Post-T	Post-T	Post-T
founded	.32 .91	.27 .88	.00 .94	.00 .63	.15 .84
work	.95 .50	.88 .55	.72 .39	.75 .13	.82 .39
name	.95 .77	.64 .85	.33 .83	.38 .88	.58 .83
found	1.00 .68	.76 .82	.39 .50	.38 .88	.63 .72
however	.14 .64	.09 .58	.00 .61	.00 .25	.06 .52
whole	.18 .68	.12 .48	.11 .56	.00 .25	.10 .49
country	.09 .41	.24 .45	.00 .50	.00 .75	.08 .53
Total	3.63 4.59	3.00 4.61	1.55 4.33	1.51 3.77	2.42 4.37

$P < .05$

表 7-1 から明らかなように、辞書使用許可の Post-Test において 4 集団全てで高い数値を出している単語が 3 点ある。すなわち、founded(.91,.88,.94,.63total.84)、name(.77,.85,.83,.88,total.83)、found(.68,.82,.50,.88, total .72) である。一方 work は低い数値を出した (.50,.55,.39,.13, total .39)。ここで語彙集団を 3 つに分類する。すなわち、第 1 系 (founded, name, found)、第 2 系 (however, whole, country) と第 3 系 (work) である。第 1 系は Pre-Test を踏まえると比較的容易に意味が推測でき、第 2 系は出来がおおよそ半々であったもの、第 3 系は意味が推測しにくかったものである。

第 3 系は Pre-Test と Post-Test とでは文脈における意味が異なったために辞書を用いても意味が推測しにくかったと考えられる (work—Pre-Test 時の意味:「働く」,Post-Test 時の意味:「作品」)。一方、第 1 系は Pre-Test と Post-Test とでも意味が変わらなかったことから、文脈における意味は同じとみなされたために、辞書を用いて意味を推測

することは容易であったと考えられる (founded—Pre,Post-Test 時の意味:「設立する、創設する」、name—Pre,Post-Test 時の意味「名づける」、found—Pre,Post-Test 時の意味「見つけた、発見した」)。また、第 2 系では whole が Pre,Post において意味を同一にしたものの、however と country はそれぞれ意味が異なった (whole—Pre,Post-Test 時の意味「全体」、however—Pre-Test 時の意味:「どんなに〜しても」,Post-Test 時の意味:「しかしながら」、country—Pre-Test 時の意味:「田舎」,Post-Test 時の意味:「国」)。

表 7-2 各集団における Pre-Test と読解テスト (Post-Test) との平均値 (獲得得点集団別)

	集団 A	集団 B	集団 C	集団 D	集団平均
	Pre-T	Pre-T	Pre-T	Pre-T	Pre-T
	Post-T	Post-T	Post-T	Post-T	Post-T
founded	.32 .91	.27 .88	.00 .94	.00 .63	.15 .84
name	.95 .77	.64 .85	.72 .39	.75 .13	.82 .39
found	1.00 .68	.76 .82	.33 .83	.38 .88	.58 .83
however	.14 .64	.09 .58	.39 .50	.38 .88	.63 .72
whole	.18 .68	.12 .48	.00 .61	.00 .25	.06 .52
country	.09 .41	.24 .45	.11 .56	.00 .25	.10 .49
work	.95 .50	.88 .55	.00 .50	.00 .75	.08 .53
Total	3.63 4.59	3.00 4.61	.00 .94	1.51 3.77	2.42 4.37
	1.26	1.53	2.79	2.50	1.81

表 7-2 より、集団 A は第 1 系の方が第 2 系を上回り、第 3 系も平均点は .50 と半数にとどまっている。集団 B は集団 A 同様に第 1 系の方が第 2 系を上回っているが、獲得得点は集団 A よりは第 2 系においては取れてはいない。むしろ第 1 系内においては集団 A よりも平均して得点を獲得していることが読み取れる。加えて、第 3 系においては平均点は .55 と集団 A よりも獲得している。

集団 C はこれまでの集団同様に第 1 系の方が第

2系を上回り、第3系も平均点は.39とおおよそ3分の1にとどまっている。しかしながら、集団Aには若干及ばないものの、集団Bよりは第2系内において得点を獲得している。一方、集団Dは他の集団同様に第1系の方が第2系を上回っているが、獲得得点は第2集団においては *country* だけが突出して取れている。加えて第1系内では *founded* は全集団の中で最も低い得点ではあるが、他の2語は最も高い得点を獲得している。しかしながら、第3系においては平均点は.13と最低の獲得得点となっている。

仮説3における回答が明確に出てはこない理由は2通りある。すなわち、1) 本研究において多義語の明確な定義がなされてはいない、2) 文脈内でどのような語数が適切かが制限されていないという点である。第1に、対象となる語が多くの意味を持つという語、すなわち多義語であるという定義はどのくらいの意味を持つ語から「多義語」と言っているのかという点が浮き彫りになる。列挙すれば、第1系内でも *founded* は大修館 GENIUS 英和辞典によると6通り（品詞別分類を除く。以下同様）の意味を持つ一方で、*name* は15、*found* は前述の *found* との意味の混同（ここでは *find* の過去形の意味）があったせいか同じ6通りでもどの意味で捉えていけばよいのかで戸惑いがあったものと推察される。同様に分析していくと、第2系内 *however* は3通り、*whole* は8通り *country* は11通り、第3系内 *work* は実に39通りの意味を持つ。しかしながら、解答のできがよかった系は必ずしも「多義語」の意味の多さとは比例はしてはいないことが読み取れている。

第2に、対象となる語が含まれている文脈がこの研究内では制限されていないという点である。すなわち文脈内に含まれる語の数が各下線部分によって差異があるということである。例を挙げれば、(1) The British Museum in London was founded in 1753. では *found* 以外に理解していかなければならない語数が8語であるのに対し、(2) It has a huge collection of works of art from all over the world. では *works* 以外では13、同様に (3) *name* 6語、(4) *found* 8語、(5) *however* 4語、(6) *whole* 11語、(7) *country* 8語 となっている。すなわち、最小4語、最大13語が含まれている文を読みながら全体の文脈を読みこなしていき、更にもっと文脈に合致するような適切な意味をあて

るといった作業が含まれていくことから翻訳にも困難をきたしていたものと思われる。文脈によっては対象となる語以外にも理解のしにくい語が含まれていたであろうとも推察される（例：*sculptures*, *Lord Elgin*）。よって辞書使用を許可された被験者は、辞書使用を認められなかった被験者よりもそのつど辞書を引きながら意味の推測を行っていたであろうと考えられる。場合によっては文脈内での推察の方が理解しやすい部分が見られていたのかもしれない。それが集団Aにおける第1系の語である「*name*(Pre-T: .95, Post-T: .77)」, 「*found*(Pre-T: 1.00, Post-T: .68)」で顕著に現れたと考えられる。すなわち意味を元来より定義づけて理解していれば問題が起らなかったかもしれない語（「*name* : 名前をつける、名前」、「*found* : *find* の過去（わかった、見つけた）」）であるにもかかわらず、Post-Test で辞書の使用を認めただけに多義語の定義に惑わされてしまい、更に文脈上に合致する語を辞書の定義の中から見つけ出そうとするあまりに逆に混乱をきたし、結果としてPre-Test よりも点数を下げたと推察することができる。このようなことから研究仮説3は回答が明確に出てはこないものと考えられる。

8. 結 論

本研究により、文法構文における理解力を通じて、辞書を用いて未知語を検索する能力と既知の文法力を備えた学習者の能力との関係に関する研究が実証された。これにより高等専門学校生における文法理解力と辞書を活用する能力も判定することができた。すなわち、辞書の活用は語彙能力が下位の集団、すなわち英検3級1次筆記試験で55%以下の獲得得点者、には有効であるということが立証された。この被験者であれば辞書の中から適切な意味を選び出すことが適切であるということが言える。しかしながら、「英検形式の文法構文テストと、辞書を使用した上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連はある」については必ずしも立証できず、「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」については立証できたものの、「多義語に直面した際にその文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める」という点については、これも必ずしも立証することはできなかった。なぜならば本研究においては多義語の明確な定義がなされ

てはおらず、文脈内でどのような語数が適切かが制限されてはいなかったからである。これらの改善については今後より詳細な研究を待ちたい。

この研究から、未知の語があった時には辞書を用いて検索することがより有効である、加えて学力的に低い者であればその効果はより発揮されるという実証はなされたものであるということが出来る。無論辞書の活用に関する研究はこれまでも無数にあり、ここでは高等専門学校生1学年で英検3級程度の実力を備えた者を対象としての実験結果であるということを加える。今後は同じ「辞書」を活用していく上であったとしても、「印刷物として出版されている辞書(紙辞書)」と「電子辞書」による検索であればどちらがより効果的か、また「紙辞書」と「電子辞書」とを活用していく上での利点、欠点はどこにあるか、「紙辞書」の活用と辞書を用いないで推測で読みこなしていく方法、及び「電子辞書」の活用と辞書を用いないで推測で読みこなしていく方法とではどちらがより効果が上がるかなど、興味のある研究分野は数多く存在する。この分野は最新かつまた深くは開拓されていない分野でもある一方で村田、山内(2004)らが先行的な研究を行ない始めていることから、今後ともより詳細かつ斬新な研究を行なっていく必要がある。

参考文献

- Bensoussan, M. "Dictionaries and tests of EFL reading comprehension" *ELT Journal* 37 (1983): 341-345
- Bensoussan, M., Sim, D., and Weiss, R. "The effect of dictionary usage on EFL test performance compared with student and teacher attitudes and expectations" *Reading in a Foreign Language* 2 (1984): 262-276
- Carter, R., and McCarthy, M. *Vocabulary and Language Teaching* Longman (1988)
- Haynes, M. "Patterns and perils of guessing in second language teaching" in Handscombe, J. et al. (eds.), *On TESOL '83: The Question of Control* TESOL Publications (1984)
- Knight, S. "Dictionary use while reading: The effect on comprehensions and vocabulary acquisition for students of different verbal abilities" *Modern Language Journal* 78 (1994): 285-299
- Lupescu, S., and Day, R.R. "Reading dictionaries and vocabulary learning" *Language Learning* 43 (1993): 263-287
- Nesi, H. and Meara, P. "How using dictionaries affects performance in multiple-choice EFL tests" *Reading in a Foreign Language* 8 (1991): 631-643
- Nunan, D. *Action Research in Language Education*. in Edge & Richards (eds.) (1993): 39-50
- Schofield, P. "Using the English dictionary for comprehension" *TESOL Quarterly* 16 (1982): 185-194
- Summers, D. "The role of dictionaries in language learning" in Carter et al. (eds.)
- Tono, Y. "Assessment on the EFL learners' dictionary using skills" *JACET Bulletin* 19 (1988a): 103-126
- Tono, Y. "Can dictionary help reference skills and reading comprehension" *Lexicographers and their works* (Exeter Linguistics Studies 14), Ed. G. James, (1988b): 198-200
- JACET 教育問題研究会 「(4)速読, (5)多読」第12章 4 技能の指導: 読む 英語科教育の基礎と実践 (2001) pp.103-104 三修社
- 高橋正夫「1. 妥当性」第5章 評価 第4節 良いテストの条件 英語教育学概論 (1999): 122 金星堂
- 高橋正夫「2. 信頼性」第5章 評価 第4節 良いテストの条件 英語教育学概論 (1999): 122 金星堂
- 日本英語検定協会「第1回一次試験 別冊解答」英検準2級全問題集 (1997): 2 旺文社
- 日本英語検定協会 「STEP Guide」(1997): 24 旺文社
- 日本英語検定協会 「平成12年度第2回・3回筆記」3級1次筆記試験 2003英検3級全問題集 (2003): 130-132, 154-156 旺文社
- 日本英語検定協会 平成12年度準2級1次筆記試験 2003英検準2級全問題集 (2003): 124 旺文社

村田年、山内豊他「電子辞書と紙の辞書の相違と両者の使い分けに関する心理言語学的考察」電子辞書研究会第1回大会(2004)
東京：早稲田大学

山西敏博「英検取得級と大学入試センター試験英語科目の点数との相関関係」第13回「英検」研究助成 研究部門 *STEP BULLETIN Vol.13* (2001):40 (財) 日本英語検定協会

付録A

英検1次試験 正当率

問題 番号	解 答	正 答 率	問題 番号	解 答	正 答 率
(1)	4	D	(6)	3	C
(2)	3	D	(7)	1	C
(3)	2	D	(8)	2	D
(4)	2	E	(9)	4	D
(5)	1	E	(10)	4	B

(英検準2級全問題集 1997, 第1回一次試験別冊解答, pp.2)

☆ 正答率 A:100-80 B:79-60 C:59-40
D:39-20 E:19-0 (%)

(正答率：全受験者のうち、正答した受験者の割合—コンピューター算出)

付録B

次の文の「イタリック体」になっている部分の意味を記しなさい。

- (1) They will found a new school in 2005. _____
- (2) He worked very hard to support his family. _____
- (3) He named his son ALK after his adventure. _____
- (4) She found gold in Japan about 200 years ago. _____
- (5) However hard you try, you cannot do it. _____
- (6) We have 40 students in a whole class. _____
- (7) I want to live in a quiet country. _____

付録C

下線部を和訳しなさい。辞書を使う許可を受けている者は辞書を用いてもよい。

- (1) The British Museum in London was founded

in 1753. (2) It has a huge collection of works of art from all over the world. The collection covers 2 million years of human history. Many people, however, come to the British Museum just to see the Elgin Marbles, a group of Greek sculptures. The sculptures are made of beautiful white stone and are 2,400 years old.

(3) The sculptures were named after Lord Elgin and (4) he found them in Greece about 200 years ago. Lord Elgin was a British diplomat in Turkey and, at that time, Turkey controlled Greece. Elgin loved ancient Greek art and wanted to introduce it to people in Britain, so the Turkish government allowed him to take the sculptures back to London.

It took several years for all the sculptures to arrive in Britain by ship. (5) However, there was one accident. A ship carrying some of the sculptures sank on its way to Britain in 1804. Fortunately, all of the sculptures were saved, and (6) in 1816 the British Museum paid 35,000 pounds for the whole collection.

The Marbles can still be seen at the British Museum today, but the Greek government has asked the British government to return them. One reason for this is because they were cleaned in the 1930s. According to some people, the cleaning damaged the whole stone. The Greek government also says that the marbles were not given but taken. But the British have refused, saying Britain has looked after the Marbles for a long time. (7) It is difficult to say which country is right, and this problem will take time and understanding to solve. (269 語)

【受理年月日 2011年 7月25日】

